

---

# 言わせて(おにーさんと岬くん)

不破

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

言わせて（おにーさんと岬くん）

### 【著者名】

ZZマーク

N9166Y

### 【作者名】 不破

### 【あらすじ】

おにーさんとおにーさんに連れ去られた岬くんのはなし。

ゆるいかんじに狂つてます。

読む人によつてはホモホモしく見えるかも。  
(HPにも掲載してあります)

ビリしても欲しくなつて、思わずとつときてしまつた。悪いことだとは解つてゐる。だけど、ビリしても、手放したくない。

「ただいま、いこ子にしてる?」

「……」

「あれ、」飯食べてないじゃない。駄目だよ、成長期なんだから。」

できるだけ怖くないようここにこり笑つて話し掛けるけれど、彼の警戒心は少しも緩まない。出されたものには水にすら手を出さないため、ほとほと困り切つてゐる。5日経つても餓死はしていないことから、ぼくが仕事に行つてゐる間に水道水くらい飲んでいるのだと思つ。お風呂やトイレには屈くようにしてあるが、冷蔵庫は部屋の外だ。一度も減らなかつたプレートを持ち上げて、思わず一つため息をつく。視界の隅でびくりと動く生命体。首のベルトに取り付けた細い鎖が、しゃらりと綺麗な音をたてた。

「……和食もいや? 困つたなあ、ぼくの料理技術だと和洋中が関の山なんだけど。」

「……」

「もしかしてジャンクフードが食べたい? ……身体に悪いけど、食べないよりはいいか

夕飯にはハンバーガーを買つてくるが、と脱いだばかりのスースを羽織つて鍵を手にとると、ズボンの裾がくつと引っ掛けられた感覚。怪訝に思つて振り向くと、だらしなく仰向けに寝転がつた彼が、白い首のけ反らせてぼくを見上げていた。細い首。細い革。自分が

やつたことを突き付けられて、やつとする。

「……なにかな」

「……あんた、なにがしたいの」

かさかわに渴いた、小さな声だった。注意して聞かないとすぐに聞き逃してしまこそつな、ちこなちこさな疑問。

「……どう意味かな？」

「……そのままのこみだけぞ」

初めて見たときよりむけた頬に、乾燥してひびのきれた唇が痛々しい。

ぼくが黙つて聞いていると、彼は使わなくなつて大分退化したした声帯を試すように、ゆつくりと話し出した。

「……身代金の要求とかもしてないみたいだし、殺しもやりもしない。ただ、何がしたいのかなあと、思つ、て」

薄い唇の、縦に入ったシワから血が滲む。眉をひそめて瞼めぐらつとした彼の方に身を屈めて、代わりに優しく傷をなぞつた。

「ぼくはきみがどうしてもほしげだけだよ。理由も目的も特にね思いつかない。」

「……ほしげっていうのは、性的な？」

「どうだろう。そんな気もするし、そんなものじゃない気もある。とにかく今までの感情とは違つていて、ぼくはよくわからないんだ」

これはぼくの真剣な悩みだ。ぼくは彼をどうしたいのかが、ぼくに

はどうしても理解できない。おそれく彼を抱こうと思えば誰を相手にするよりも興奮すると思うけれど、だからといって彼に恐れられたり嫌われたりするのは、嫌だ。

「……よくわかんねー」

「うん、ごめんね。でも、お願いだからぼくの傍にいて」

自分勝手なぼくのお願いに、彼は逆さまになつたままぼくの顔をじつとみつめて、それから、薄く笑つた。

「おにーさん、俺のこと好きなんだ?」

「……うん」

「俺に嫌われたくないんだ?」

「……うん」

「俺のこと殴つたり蹴つたり殺したりする予定、ある?」「まさか!」

何をいつているんだ、と思つた表情もそのままに彼の顔を見返せば、悪戯に成功した子供のような眼でこちらを見ていた。何。なんで、そんな顔するの。

「おにーさん、お腹空いた」

「……え?」

「今まで、「飯食べなくて」と言つたの」「

「……あ、いいんだよ、別に。今買つてくるから、ちょっと待つてて」

先程までと違つた雰囲気に困惑つて、逃げるよつと上着を羽織つて外にでた。後ろで何かを言つてこたよつたけど、混乱したぼくの脳には言葉として受け入れることすらできない。

落ち着け、落ち着け。ポケットの中で遊ぶ鍵を捜す。彼が笑うはず  
なんてないんだ。絶対に。ぼくは彼を無理矢理掠つて閉じ込めて、  
なのに、彼がぼくに笑うなんて、そんなわけ、

外側から鍵をかけて、電子キーも施錠した。そうだ。ぼくは彼を閉  
じ込めている。そんなわけ、ない。

閉じて

(その瞬間僕だけの君になる)

笑うようになった。甘えるようになった。おかえりと言つてくれた  
り、気まぐれで触れてきたりもしてくれる。

彼はぼくの隙を待つているのだろうか。信用を得て、外に出たいと  
ごねて、信じたぼくの手から擦り抜けて警察に駆け込むのだろうか。  
彼は一体何を考えているのだろう。鎖で繋いでも、彼はぼくの近く  
にいない。

彼が眼を細めるたびに、ぼくは彼を信じられなくなる。退屈だと擦  
り寄つてくるたびに、ぼくに外出をねだるのかと疑う。自分でもう

たぐり深くて嫌になるけれど、彼が何の打算もなくぼくに気を許すわけがないのだ。そんなこと、誰にいわれなくとも理解できる。

「おにーさん。今日の『』飯はなーに？」

「今日もページーフシチュー。あと、パンとサラダ。」

キッキンでおたまを握っていたら、彼が気まぐれな猫のように鍋をのぞきこんだ�다。最近染めたばかりだとこう白金の髪がぼくの眼の少しだけさりげなく揺れる。ほくのつくりたじこ飯を食べてくれるようになつた。無防備に、話しかけてくれるようになつた。ぼくは少しずつ彼を手にいれながら、少しずつ失つてゐる。

「やつた、ビーフシチューすきー。」

「それはよかつた。もうすぐできるからお皿を出してくれるかな？」

「はーい

ふわふわとした雰囲気の彼が動くと、しゃらしゃらと鎖が鳴る。彼の首から繋がれた拘束は、十分な長さをもつて彼を縛り付けている。

「どのお皿ー？」  
「白いスープ皿がいいな」  
「わかったー」

彼は自分を縛り付けるものやぼくに向もいわない。掠ってきたばかのころはがむしゃらに暴れて離せやめることからだせといつたが、次第にそれなくなり、喋らなくなつた。そして今は、こんなにも近くで彼は笑つてゐる。なんでだらつ。恨まれて嫌われる覚悟を決めて、飼つてゐるのに。

「おにーさん?どうしたの?」

鍋を見つめたままぼんやりしていたらしげぼくを心配そうに覗き込んで、彼はぼくに問い合わせる。ぼくはなんでもないよと頭の両端をつりあげて、どうにか笑顔をつくつてみる。

黙つて

(君の言葉は信じられない)

最近、おにーさんは俺を持て余している。

一週間ちょっと前に道で歩いていた俺を闇夜に乘じて搔つ攫つてきたおにーさんは、ちょっととかっこいい首輪と鎖を俺につけておとなしくしてねと頭を撫でてきた。そりやあもつ、最初はなんだこの危ない野郎はと思いましたがね。暴れても無駄だと理解した2日目からおにーさんことをひたすら観察し続けた結果、そう危ない奴でもないんじゃないかと判断した。

確かに初対面つていうか道で見かけただけの俺を拾つて飼つちゃうくらいだから、マトモな部類ではないのかもしないけど。でも、普段の行動には筋が通つてるし、俺にも危害を加えようといふ気は

ないらしきし。普通に学校とかで出合っていたら、友達になついたかもと思う。要は、俺はおにーさんを嫌いじゃない。

「おにーさん。退屈一遊んで？」

元々寂しいと死んじゃう兎な俺としては、一日の大半を一人部屋で過ごすのは拷問にも近い行いだ。だから、仕事から帰ってきたおにーさんにおかえりと言つてからは、もう自分でもうさいくらいてへばり付いて離れない。今もソファーに座つて窓いでいたおにーさんの背中に抱き着いてるし。「めんね、疲れてるのに。でも俺にはおにーさんだけしかいないんだから、ちょっとくらーの我が儘は許してほしい。

少しウエーブがかかつた柔らかい髪に鼻を近づけると、お風呂あがりのお湯とシャンプーのいい匂い。ぐりぐりとその髪に顔を埋めるよつに擦り付ければ、おにーさんは困ったよつな顔で俺をやんわり引き離す。

「もう遅いんだから、寝なくちゃ。」

「昼寝したから眠くないよー。おにーさん、眠いの？」

「いや、まだ平氣。退屈なんだつたら、何か見るかい？」

そういつて背もたれに俺がへばり付いたソファーから離れてDVDを取りに行く。その自然といえば自然に離れた後ろ姿をぼんやりと見つめながら、細い鎖を人差し指に巻き付けて離した。

多分、おにーさんは俺を掠つたことを微妙に心苦しく思つていて、だから俺があにーさんを嫌わないはずがないとか思つてるんじゃないかなと思つ。俺がこんなに態度に出しているのに、信じてくれないなんて失礼だよね。だけど、そんなマイナス思考で自虐的なところも、結構気に入つたりする。

「何がいい？」

「アクションでコメディーな奴がいいー」

「なかなか難しい注文だな」

苦笑するおにーさんに、わざとですよーとはいわずにつっこり笑つてみせる。そりやあ朝から夕方までこの部屋に一人ですからね。おにーさんのコレクションの傾向なんて、知り尽くしてますとも。週間以上ここにいるのに。

俺はおにーさんの名前を知らない。おにーさんも俺の名前を聞かない。まあ、荷物の中に学生証とかも入っていたから、知つてゐるには知つてるかもだけど。でも、呼ばれたことは一度もない。もう、一週間以上ここにいるのに。

大好き。

でも言つたつて絶対信じてくれないと思う。そんなの、俺は嫌だ。告白流されるとかショックすぎるもん。だから、しばらくは、このままで。

分かつて

(でも分からぬほし)

ぼくは彼のことが好きなんだ。それだけが、疑いようもない真実。

彼を閉じ込めて、一月がたつた。

大学生らしい彼は幸運にか不幸にか、先月の半ばから来月の末まで夏休みらしい。テストも全部終わつた後だつたし問題ないよとこにこしていただけれど、バイトに行つたり友達と遊びに行つたりしたいだろうにと思うと、後ろめたさに胸が痛んだ。

丸々2ヶ月以上の休みに慣れた大学生である彼は、5日しか纏まつた休みをとれない社会人に驚いていたけれど、仕方ないなあとふにやりとした笑顔を浮かべてじゃあ全力で遊ぼうねえと指切りをせがんだ。

ぼくは確実に彼の貴重な時間を奪い、くだらない日常を強いている。憎まれて当然だ。彼の細く骨張つた小指にぼくの小指を絡ませながらあらためて自分に言い聞かせるけれど、淡い希望をいだいてしまうのもまた、事実。

笑うようになった。甘えるようになつた。おかえりと言つてくれたり、気まぐれで触れてきたりもしてくれる。だけどぼくは彼をどうしても信じられない。信じられないのだ。

「5日かー、あらためていわれる」と何していいかわからなくなつちやうなー。とりあえず一緒にパエリア作つて食べよつよ。あとケーキも焼こうねー

「……そんなことでいいのかい？」

「え、何そんなことつて。じゃあ、24全部見よつか。俺見たことないんだよー」

へにやりと笑つてだらしなくそのしなやかな身体をソファーに伸ばす彼の首から、強固な戒めが延びる。こけていた頬にも張りが戻つたし、以前よりも栄養が足りているのか、髪や唇のツヤも増した気がする。

このところ、彼に触れてみたいという衝動が強くなっている気がする。無防備に抱き着かれたり投げ出された腕や足を見るたびに、何か恐ろしい気分が溢れそうになつて急いで目をそらす。この感情の正体はわかつてゐる。だけど、彼に向いていい類のものではないこともわかつてゐる。無理矢理に掠つておいてよくいうとは自分でも思うが、本当にぼくは彼を失いたくないと思つてゐる。

嫌われるのも憎まれるのもかまわない。しかたないと思う。だけど、彼がぼくの手の中からいなくなつてしまふのだけは嫌なのだ。もしもそんなことがあつたら、ぼくは多分彼を探し出して二度と出られない檻の中に入れてしまつだらう。ぼくも一緒に入つて外側から鍵を掛けてしまうのもいいかもしれない。そのまま共に朽ち果てて、誰にも気付かれないまま砂になつてしまえばいい。

彼は今を大切にする。ぼくは永遠を夢見ている。だからぼくは彼の言葉が信じられないのだ。彼がぼくを好きだといったって、それは明日の彼の感情とは別物なのだから。

「おにーさん、おにーさん」

「……なんだい？」

気がつくと彼が心配そうな顔でぼくを覗き込んでいた。社会人になつて上達したアルカイックスマイルを咄嗟に頬にはりつけたら、不愉快そうに顔をしかめられた。

「おにーさん、疲れてる？おれ、さつきから呼んでたのにー」

「え、」めん

「別にいいけどー、明日から思つたり遊ぶんだから、今日は早く寝ちやいなよ」

焦点が合わないほどに近い位置で細められている彼の目が、心配の色を浮かべている。彼はとてもやさしい。ぼくはそんな彼をこの腕の中にあわめてしかたなくなつて、そうするよ、とソファーから立ち上がつた。

「おやすみ、おにてーもん」

「おやすみ」

ひらひらと手をふる彼に挨拶を返して、彼を閉じ込めている部屋の扉を閉めた。そのまま一重の鍵をかけて、ゆっくつと息を吐き出す。誰かぼくも」の部屋に閉じ込められればよい。さうすれば、ぼくは、

隠して

(もう近づかないでほしくない)

何の仕事をしているのかはさうぱりだけど、ひつひつ部屋と人一人楽に養えちゃつてることから多分けつこう儲かる仕事。  
そういう仕事つてやつぱり忙しにものなのか、俺の「主人サマは

俺が起きていないような早朝から、お腹と背中がくつつきやうになると8時くらいまで帰つてこない。つまりおにーさんが俺のために使った時間は一日4時間くらいであつて、残りの20時間を俺は孤独と欠伸を噛み締めて生活してくる。正直退屈だ。だからおにーさんが夏休みとして貰つたという5日間の連休を、俺はずっと楽しみにしていた。8月の半ばから今日まで、半日余りをだ。それなのに。それなのに！

「…………ごめんね」

「…………仕事だからしあうがないと思つ」

ネクタイを締めてきつたりと高そうなサマースーツを着たおにーさんが、申し訳なさそうに俺の顔色を伺つてゐる。神経質そうな銀縁眼鏡の奥の目が困ったように揺れるけれど、どうにも傾いたままの俺の機嫌はなおつてはくれない。仕事だからしあうがないの。ちゃんと、そう思つてゐるのに。

「…………おにーさん、情けない顔」

「だつて、君が、」

「怒つてないつてー。ちょっと拗ねてみただけですー」

多分もう時間に余裕がないのだろう、さつきからしきりに壁の時計を気にしているおにーさんに、へらつと笑つてみせて背中を押す。トイレもお風呂もある部屋の入口までぐいぐい押して歩いていつて、少し手前でその細く広い背中から手を離した。

「こつてらつしゃー」

ふり向いたおにーさんに手を降ると、一瞬傷ついた顔をして、泣き出すのを我慢してゐみたいな表情でいつてきます、といった。

俺には届かないドアを開けて俺の届かない世界へと出していくために  
ーさんは、俺の隔絶された世界に苦しんでいる。この狭い世界の外  
でおにーさんが何を考えてどんなことをしているのかなんて俺には  
知り得ないけれど、この部屋にいる時のおにーさんと別のおにーさ  
んがいるということは、確か。

しゃらりとなる鎖を撫でて、静かに音をたてる扉をぼんやりと見た。  
きっと今おにーさんは痛む良心を抱えながら、嫌われるのはしちゃう  
がないとか考えているのだと思つ。

馬鹿だなあ。今更そんなこと、思つわけないのに。

俺は彼に首輪をつけて、鎖で繋いでしまいたい。

細くて頑丈な銀の人差し指を巻き付けながらたどつた先には、彼  
がいればいいのことと思つ。

もしかしたら俺は狂つてしまつたかもしない。拉致されて、  
監禁されて、その犯人に焦がれてしまつなんて、どこかの心理学の  
実験結果にありそなくらい愚かな事だ。喜劇にもなりはしない。  
渴いた笑いが、堪えきれずに少し溢れた。

一人取り残された部屋の中で、ふらふらとソファーに近づいてど  
さりと座つた。机の上には、昨日一人で見ようと選んでおいた数枚  
のDVD。投げ付けて割つてしまえたら少しさは気分がよくなるかな  
あと思つたけれど、そうする気力もなかつた。

ただ、いいのない淋しさと虚しさがうずまいている。会いた  
いよ。会いたい会いたい会いたい。

外に出たいとか逃げたいなんて思つてないよ。だから、俺と一緒に  
にここにいてよ。

ねえ、おねがい。

言わせて  
(お願い、ひとつだけ伝えたいの)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9166y/>

---

言わせて(おにーさんと岬くん)

2011年11月27日14時49分発行